

## フレンドシップラジオの番組で流れることばの簡略な説明

あ行	アーメン	ヘブル語で「真実」の意味。世界で同じ発音がそのまま用いられている。祈りや賛美の後に唱える時は、「真実そのとおりです。」「真実にそのようになりますように。」という意味が込められている。
	愛	この放送では、神の愛という意味合いで用いられることが多い。人間の持つ愛は自己中心的な愛であるので、突詰めれば得ること奪うことを目的としている。これに対し聖書の説く愛は、自己犠牲の愛・惜しみなく与える愛である。この愛のモデルは、神の御子イエス・キリストの生涯とその十字架の購いに集約できる。神の愛は、いわゆる友愛・兄弟愛とは区別されるべきで、人間がこの愛について理解するためには、聖霊なる神の助けが不可欠である。
	買い (あがない)	奴隷制度下において奴隷に売られた者や捕虜になった者を、身代金を払って買い戻すこと。聖書では、罪のあがないということばで用いられることが多い。人間には対神的な原罪があるために、罪の奴隷となってしまっていたが、神はその愛のゆえにそのひとり子イエス・キリストを世に遣わし、十字架による血と死という身代金を払って買い戻して下さり、神との和解を成立させ、神の子(養子)としての身分を与えて下さった。贖罪(しょくざい)・なだめ(なだめの供え物)も同じ意味。
	悪魔	サタンとも呼ばれる。墮落した天使たちのリーダーであり、神と人間に敵対している存在。聖書のことばを妨害し、人間の霊を盲目にし、あらゆる悪に誘うことを通して、神と人間を引き離す働きをもたらす。今も絶えず人間の罪を神に告発し続け、告発者との異名を持つ。
	安息日 (あんそくにち)	神が天地万物を創造された後、第7日目にそのわざの完成を宣言し休息されたことを記念して定められた日。一週間の中で神によって祝福され、聖別されたこの日に神の民は、あらゆる労働から解放されその安息を楽しみ、神を礼拝した。ユダヤ教では土曜日が安息日とされているが、キリスト教ではイエス・キリストの死よりの復活を記念して「週の初めの日曜日」に礼拝がささげられている。
	イエス・キリスト	三位一体の御子なる神。イエスは名を表し、キリストはメシア(油注がれた者)という救い主の称号を表している。人類の神に対する罪を購うために、父なる神によって地上に遣わされた御子イエス・キリストの生涯は、歴史的にも証明されている事実であり、全聖書はキリストについて証言しているものである。神の御子イエス・キリストを、自分の救い主として信じ受け入れることによるのみ、神に対する罪の赦しが与えられる。
	異邦人 (いほうじん)	ユダヤ人以外のすべての民族を指す。イエス・キリストの出現以降、異邦人にも信仰による救いの道が開かれた。
	インマヌエル	ヘブル語で「神が私たちと共におられる」という意味。この世に来て下さった神のひとり子イエス・キリストを指し示すことばとして理解されている。
	栄光	聖書では、神の臨在(りんざい)の象徴として使われている。神の卓越性と神の完全性を表し、その特別な現れを意味する時に用いられることも多い。
か行	神	全知・全能・遍在・永遠である全存在の造り主。一般的な日本人が言う「かみ」は、格別にすぐれたものや現象を指し示している言葉として理解されており、その対象はあらゆる有形無形の物体と現象に及んでいる。これに対して聖書の言う「神」は、全知・全能・遍在・永遠の「人格的唯一神」として示されており、この瞬間もその意思によって全存在を支配しておられる。人格を持っておられる霊的存在でもある神は、ご自身を啓示によって人間に示しておられる。自然界を通してご自身を啓示し、聖書が記すイエス・キリストの購いを通してご自身を啓示しておられる。なお英語の GOD(神)の語源は、人間の「礼拝の対象」を意味している。
	神の山	山の神ではなく、神の山。聖書では、シナイ山・ホレブ山を指している。シナイ半島に位置し、イスラエル民族に「十戒」が与えられた場所とされている。シナイ山とホレブ山は、同じ山として描かれているが、ある説によるとホレブは山脈を指しシナイは山頂を指しているようだ。
	感謝	この放送のキリスト者ではないリスナーの方が違和感を持つ言葉のひとつでもある。「感謝です!」「感謝!」などの教会用語として用いられた場合、強い違和感を覚える方が多いようである。
	義	正しいことの意味。聖書では、神の基準による正しさを意味する。人間には実現できない正しさではあるが、神の御子イエス・キリストを信じることのみによって、神の前に義とされる。
	旧約聖書	イエス・キリストの降誕以前に書かれた聖書で39巻から成る。「律法」「詩」「預言」の3部で構成されている。イスラエル民族を中心とした歴史、法律、知恵、預言、賛美など内容は多岐にわたっている。その中心的な主題は、神による人類の救い＝つまりイエス・キリストである。約1000年の期間に、数多くの筆者の手によって完成したものであるが、神の靈感を受けて、この主題のもとに完全な一致を保っている。新約聖書との関係においては、その準備、緒論、ひな形としての存在であると言える。
	教会	原語のギリシャ語によると、エクレシア(召し出し)という意味をもつ。本来は宗教的な意味合いはなく、政治的な集会を指す言葉として用いられた。聖書では2つの面をもつ言葉として記されていて、一つはイエス・キリストを頭とする体＝目に見えない有機的な一つの共同体であり、もう一つは、各地にある個々の諸教会である。聖霊に導かれている現在では、神はこの教会との関係においてのみ神の働きを実現される。
	兄弟	この放送のキリスト者ではないリスナーの方が違和感を持つ言葉のひとつ。キリスト者同士の関係を例えるために用いられたのが本来的な意味であるが、実際の適応においては配慮が求められているようだ。初めて教会に足を運んだリスナーが「・兄弟!」と声を掛けられて「ギョツとした」との報告もある。
	きよめ	聖書では、「儀式的なきよめ」と特別に選び分けるという意味の「聖別」を指している。キリスト者の生活に関する「聖化(せい化)」を指す場合もある。
	悔い改め	心を、神が良いとされる方向に向け直すこと。まことの神を離れ、神を礼拝しない心は、神に背を向けた状態にあり、そこからいろいろな罪悪、不幸、みじめな状態が生じる。まことの神に背を向けた状態であるその罪を認め、その状態を捨て、向きを180度変えて神に向かい、神を信じ従う心に定めること。
	偶像礼拝 (ぐうそうらいはい)	神を具体的な物体や現象として表したものを「偶像」を礼拝する行為。宗教史はそのまま偶像礼拝の歴史とも言い表すことができる。人類の初期段階から現代に至るまで各地で盛んに行われている。聖書は、偶像を造ることも礼拝することも厳に戒め禁じており、キリスト者の生活現場における偶像礼拝との妥協について警告している。また「貪欲」が偶像礼拝に他ならないことも指摘している。
	口づけ(ハグ)	この放送のキリスト者ではないリスナーから質問があった言葉のひとつ。聖書の中に「きよき接吻」「愛の接吻」と記されている箇所もあるが、聖書の記述として出て来る「口づけ」は当時の一般的なあいさつであるが、常識的に日本の教会

		に適應できない習慣。他にもあいさつとしての「握手」があるが、日本人の誰もが受け入れている習慣とは言えず、日本の教会でのあいさつの方法としては「会釈」「言葉」によるあいさつが無難であろう。
	クリスチャン	イエス・キリストの弟子の総称。AD 43年頃からキリスト者ではない人々によって呼ばれるようになったあだ名。聖書の記述として出て来るのは新約聖書に2箇所程である。日本のキリスト教会は、欧米からの宣教師の影響が大きいため、キリスト者のことをクリスチャンと呼ぶ習慣が根深い。
	献金	原語によると、名誉と栄光をささげる贈り物・貧しい人への贈り物を指す。強いられてではなく、自発的に感謝と真心を持ってささげることが勧められている。神の前では、額の大小ではなく「心」が重要視されている。新約時代の現代日本における「十分の一献金」の有効性について、ネット上などで疑義の声が上がっている。
	献身者	原語によると、相手（神や人）と人格的に平和であることを指す。すべてのキリスト者は、神に従うことを通して既に献身者である。
	告白	聖書では、自分の罪を認め言い表わす場合や自分の信仰を公にする場合に用いられている。
さ行	再臨 (さいりん)	人類の罪を購うために十字架に付けられ、死んで葬られ、三日目に死より甦り、多くの証人の前で天に帰られたイエス・キリストが、神の定めに従って再び目に見える姿でこの世に来られること。再臨のイエス・キリストは、今度は救い主としてではなく、裁き主としての役割を担っておられる。
	三位一体 (さんみいつたい)	唯一の神は、三位の人格をもっておられ、父なる神・子なる神・聖なる神は相互の交流を保持しながら神の業を進めておられる。父なる神は「人類救済計画」を実現するため、子なる神をイエス・キリストとして地上に遣わして十字架による「贖罪」を成し遂げさせ、それを完成させるために天に引き上げ、その贖罪を人類に適應させるために聖なる神をすべてのキリスト者に遣わして下さっている。聖書はこのようにして、三位一体の神を事実に啓示している。
	サタン	悪魔の項を参照。
	聖霊 (せいれい)	三位一体の神の一つの位格。聖霊は神そのものであって、単なる神の力とか影響力という物体や現象ではなく、父なる神、御子なるキリストと同じ権威と権能を持っておられる。聖霊は、御子イエス・キリストを「主」と告白させ、その購いを信じ受け入れる者の内に住まわれており、絶えず相互の交流を求めておられる。いつもそばにいて下さり、とりなし・助け・励まし・信仰を与えて下さり、聖書のことばを理解させて下さり、罪と義と裁きについて世の誤りを指摘し認めさせる働きを今もされている。
	新生 (しんせい)	神によって霊的に新しい存在とされること。自分の罪過と神に対する罪によって霊的に死んだような存在であった人間が、神の恵みによる招きに応じて神に立ち返ることによってもたらされる。これは聖なる神の助けと導きによる以外に実現されることはなく、神への立ち返り・悔い改め・信仰ときよめなど、キリスト者の生活全般に影響をもちます霊的な復活である。
	信仰	キリスト教では、まことの神に対する全人格的な信頼のことを言う。神のことばである聖書に対する全人格的な信頼も同じことばを用いる。(=聖書信仰)
	信仰義認 (しんこうぎにん)	神の御子イエス・キリストによる贖罪(しよくざい)を信じ受け入れることによってのみ救われ、神の目に義と認められること。
	新約聖書	27巻から成る聖書の第2の部分のこと、イエス・キリストを仲立ちとした新しい契約の書。新約であって新訳ではない。旧約の場合も古い訳の聖書という意味ではない。「福音書」「書簡(手紙)」「黙示」で構成されている。旧約聖書との関係においては、預言の成就・律法の完成・神の具現という意味を持つ書。
	救い・救い主	キリスト教では、罪・悪・危険からの救助と和解による神との関係の正常化がもたらされることを言う。救い主(メシア)は、神の御子イエス・キリストを指して用いられている。救いは、何かの行為や功徳を積むことによらず一方的な神の側からの恵みとして与えられる賜物(たまもの)として受け取ることでできるものであり、イエス・キリストの十字架による贖罪(しよくざい)を信じ受け入れることによってのみ、得ることができる。
た行	罪	神の律法に違反すること。神への反逆、敵対を意味する。人は生まれながらにして、原罪ゆえに罪の支配下にある。それゆえ聖書では、すべての人間に対して「罪人」という表現を用いている。人間は生まれながらにして神から遠く離れた存在であり、自己中心的な本能であるがゆえに、罪に関するコントロールが全く効かない「罪に支配され続けた状態」とあると言える。罪の問題の根本的な解決は、キリストの十字架による購いの恵みによる「神との和解」以外はないことを、聖書はくり返し語っている。
な行	肉	肉を持つすべての存在。特に、神の対極に位置する罪ある人間の状態を指して用いられている。魂に対する言葉として用いられることもある。他に、欲に支配された人の姿や自然本来の人間性を意味する。
は行	福音 (ふくいん)	良い知らせのこと。神がその一人子イエス・キリストによって、罪に支配されている人類を救うという、人類救済計画を指して用いられる。その内容は、旧約聖書の実現としてのイエス・キリストの到来とイエス・キリストの十字架による死と復活と昇天・キリストの再臨・悔い改めと受け入れることによる罪の赦しなどである。
ま行	御子 (みこ)	神の子イエス・キリストを指す言葉。
	御霊 (みたま)	亡くなった人の魂の意味ではなく、キリスト教では聖なる神を意味する言葉。
	御手 (みて)	神の手のこと。神の業(わざ)や導きを示すことばとして用いられる。神の愛・守り・力をもたらす象徴として用いられる時もある。
	御名 (みな)	神の名のこと。賛美や礼拝の対象者としての神を示すことばとして多用されている。
	御業 (みわざ)	神のなさる業のこと。神の介入による人知をはるかに超えた出来事を指す。
や行	世	聖書では、人間が住み活動する支配領域を意味している。比喩的な意味で、天国に対する地上を指す場合もある。
ら行	らい病	聖書ではある種の重い皮膚病を指しているが、決してハンセン病のことを指しているのではない。誤解を避けるための教会や聖書での用語の置き換えは、ほぼ完了している。
	霊(の家)	幽霊のことではなく神の霊=聖なる神を指す。霊の家=幽霊屋敷ではなく今日的にはキリスト教会を指す。
わ行	和解	原罪ゆえに神と人との関係は破壊され断絶していたが、神の一方的な愛と恵みによって御子イエス・キリストの十字架の死と復活による「罪の購い」が成し遂げられ、神と人との関係回復が成立したことを言う。